

中国東北地方の新石器時代における社会形態変遷の研究

富, 宝財

<https://doi.org/10.15017/1931670>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：



氏 名	富 宝財			
論 文 名	中国東北地方の新石器時代における社会形態変遷の研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	宮本 一夫
	副 査	九州大学	教授	坂上 康俊
	副 査	九州大学	教授	遠城 明雄
	副 査	九州大学	准教授	辻田 淳一郎

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文では、集落遺跡の規模や分布、集落構造の分析を通じて、中国東北地方における新石器時代の社会の通時的な変化を明らかにした。さらには墓葬分析を加えることにより、新石器時代における農耕の拡散・発展と社会集団の複雑化の過程を復元し、社会の発展過程を示すとともに、墓制の変遷から見た母系あるいは父系といった社会集団の復元を試みた。一方で、当該地域の新石器時代末期は、それまでに見られた農耕社会の進展に伴う社会の複雑化から一転して社会の退行現象を示しており、これは、この時期に見られる環境変動に適応する形で、当該地域に牧畜民たちが流入する大きな変化を現している。こうした長城地帯を伝わる東西方向の文化接触や文化交流は、後の北方青銅器文化社会の幕開けの前史をなすものであり、東アジア史的な転換を、この中国東北部でダイナミックな変動として立証するものである。

第1章は研究史を踏まえ、本地域の社会復元を行うため、集落論と墓制論さらに方法論をまとめた。特に方法論として、住居址床面において男女の分業を示す遺物の散布状況から消費単位を推定し、社会変化や社会の基礎単位の変化を探ることを述べる。第2章から第4章では、遼西、内蒙古中南部、遼東半島といった個別地域における集落遺跡の時空的変動と集落構造の変遷を分析し、各地域での集落から見た社会の基礎単位の変遷をモデル化する。第5章は、墓制分析を行い社会進化の過程を示すものである。まず興隆窪文化に見られる屋内墓の社会的な評価から、農耕社会の進展に伴い次第に階層化が進む紅山文化の積石塚に対し、DNA分析結果を援用しながら、母系社会の集団関係を推定する。第6章の白城・通遼地区では、近年、集落遺跡の発掘調査が進んでおり、集落構造の変化と墓制分析の結果を踏まえて、当該地域の変遷を考える。第7章では、黒龍江地区の石鏃と玉器の形態的な変遷を踏まえ、その系統性から地域関係を推定しながら、墓制の変遷と他地域の墓制への系統関係を推測する。さらに、狩猟社会を基本とする黒龍江地区が父系社会の集団関係にあると推定する。第8章では、これまでの集落分析と墓制分析の結果を踏まえ、それぞれの段階的な変遷を明らかにしていくが、その結果として地域間において発展段階での差違が認められる。これは生業の違いに見られる発展段階の違いとして解釈される。農耕社会が発展する遼西や内蒙古中南部では、社会の複雑化が示され、農耕の広がりに伴い、遼東半島や白城・通遼地区でも社会の複雑化が進行する。一方、一貫して狩猟採集社会である黒龍江地区では父系社会での小規模集団社会が継続する。第9章では、こうした社会変遷の段階性を東北アジア全体でまとめることにより、農耕社会の進展と広がりの中に次第に社会の複雑化を空間的な広がりとして見せるが、一方で新石器時代末期の気候の寒冷化に伴う長城地帯の草原化による牧畜社会への内蒙古中南部から遼西の変

遷は、集落構造や墓制において一見して社会の退行現象とも見えるような変遷を示す。これは生業基盤の変化に伴う社会構造の変化を示すものであり、人の移動をも含めた大きな社会変動であった。さらには後の北方青銅器社会の基盤を形成するものである。このように、中国東北部の新石器時代の社会変化は、東アジア全体の新石器社会から青銅器社会への大きな変動を特徴付ける変化を基層的に示す地域であることを示すものであり、環境変動と社会変動の関係を考える上で重要な地域と考えられる。そうしたダイナミックな動きを社会構造の変化として考古学的に明らかにし、人類史の一モデルを提供したところに本博士論文の意義がある。

以上から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認めるものである。